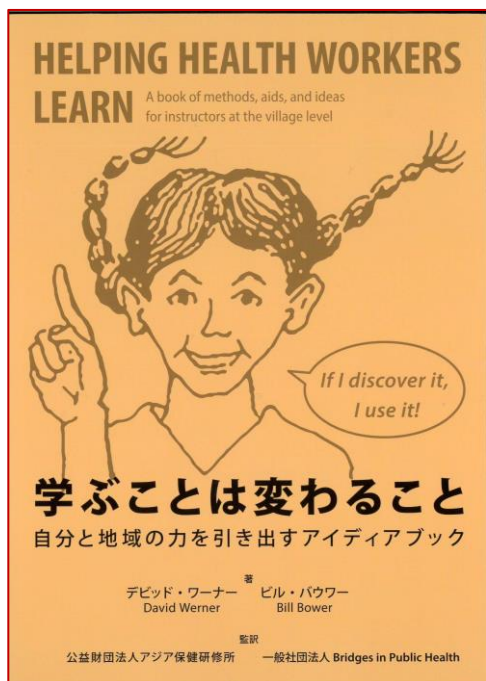


【ごあいさつ】

元旦の能登半島地震から半年以上たちましたが、被災された皆様やご関係の皆様はいまだご心労が続いているかと存じます。心よりお見舞い申し上げます。

デビッド・ワーナー氏のHelping Health Workers Learnを翻訳した「学ぶことは変わること 自分と地域の力を引き出すアイデアブック」は書籍版・PDF版ともに絶賛販売中です。また、本を購入された方へのアフターケアとして、共同監修したアジア保健研修所(AHI)が「ちょい読みサロン」を開催しています。こちらぜひご参加ください。(詳細はAHIにお問い合わせください。)

BiPHは2024年8月に法人設立10周年を迎えます。設立当初に始めた勉強会「てらこや」は今年5月時点で90回実施しました。講師派遣についても、国際保健、多文化共生と健康、障害と開発、医療ボランティア、国際協力などのテーマで全国各地でお話しています。ご依頼があればどこでも派遣しますので、お気軽にお声がけください。次の10年に向けて、BiPHは今後も3つの事業「人づくり」「知づくり」「場づくり」に取り組みます。どうぞご支援のほどよろしくお願ひします。



Helping Health Workers Learn日本語版
「学ぶことは変わること」
特設サイトはこちらからどうぞ →



【東ティモールプロジェクト(フェーズ2)に向けて】

JICA草の根技術協力事業に提案した東ティモールプロジェクト(フェーズ2)は2024年度は残念ながら採択されませんでした。しかしながら、BiPHは名古屋市立大学看護学研究科とパーツ大学(東ティモール)の国際共同研究プロジェクトに、協力団体として参画することになりました。

2024年1月にはプロジェクトの一環でパーツ大学から研究者2名が来日し、2月と5月には日本側の研究者(のべ4名)が東ティモールに渡航しました。

データマネジメントの面から「Health for All(みんなの健康)」に関わるスタンスは今までどおりです。先の未来を見据えて、今できることをこつこつとやっていきます。そして、国際共同研究への協力の経験を、フェーズ2につなげていきたいと思ひます。



左からパーツ大学のSantiagoさん、名古屋市立大学 (& BiPH代表)の樋口さん、名古屋市立大学 (& BiPH会員)の江さん、パーツ大学のJerryさん
(2024年1月、名古屋市立大学にて)

【地域共生社会実現のための支援者向けカードゲーム】 「Let's 協力」



支援の現場に携わるみなさん、こんなお悩みはありませんか？

- ・自分の組織だけではニーズに対応しきれないと感じることが多い。
- ・なんとかしたいけど現場では日々の仕事に追われて手いっぱい。
- ・横の連携が大事といわれても、どこに声をかけたらいいかわからない。
- ・でもつながることで可能性が広がることへの期待感はある。

そんなみなさんにおすすめの研修をご紹介します。(公財)日本障害者リハビリテーション協会(JSRPD)が、地域の多様なニーズに対応するための研修プログラムを開発しました。特色は世界保健機関(WHO)が提唱する「地域に根ざしたインクルーシブ開発(CBID)」*の考え方を取り入れていることで、カードゲームを使って「連携」や「協力」を体感できる研修となっています。

研修時間は2時間で、前半は住民のニーズと地域のリソースをつなげるカードゲームをグループで行います。後半はゲームで気がついたことを振り返り、自分の地域で実施するにはどうしたらいいかについて参加者みんなで話し合います。地域の多様なニーズを知るとともに、地域がつながったときの可能性を知ること、そして、当事者への直接的アプローチだけではなく、地域へのアプローチの有効性と方法を知ることが、この研修のねらいです。

研修の対象者は、重層的支援体制整備事業に携わっている方をはじめ、地域づくりに関わる団体、医療や福祉・外国人支援・子育て支援など実際のサービス提供に関わっている方、民間企業、多職種連携を必要とする専門職の方、地域活動に関心のある学生などです。当初は保健医療や福祉関係で実施されることが多かったのですが、最近では国際交流関係の団体や民間企業からの研修依頼も増えています。



「Let's 協力」公式ブログより

実際にやってみると、支援が必要な方について、表面上は知っているも本当はどのようなニーズがあるかを知ることが大切だと気づきました。また、グループワークではさまざまなバックグラウンドを持つ人とチームを組むこともあり、そのぶんニーズが多面的に見えました。自分で考える支援では視点が狭かったですが、チームで話し合うことにより具体的な支援と課題を見出すこともできました。実際の支援の現場では、ニーズが重層化しているケース(例えば発達障害が疑われる海外ルーツのこども)も多く、他機関と連携して対応する必要があります。この研修で学んだことがさっそく役立ちそうですね。

研修を通して感じたことのもう一点は、専門家でなくてもできる支援があることです。例えば会社員として働く中で、同僚や顧客の中で困っている方に支援できるスキルやノウハウは、意外と多くの人を持っているのではないかと思います。ひとりひとりが今の自分自身で取り組めることを考えるきっかけになりました。

詳細は以下をご覧ください。

地域共生社会実現のための研修プログラム～困難な時代を乗り越えていくための支援者向けカードゲーム「Let's 協力」～ <https://www.jsrpd.jp/overview/cbid/training/>

*CBR/CBID (community-based rehabilitation/community-based inclusive development) : 障害のある人を含む困りごとをかかえる人たちの地域でのインクルージョン実現のための取組み

【勉強会「てらこや」報告】

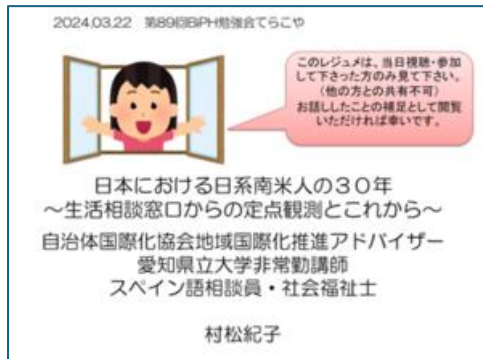
*毎回の勉強会は、ウェブサイトとFBでもご報告しています。

1月26日:浜松市の在日外国人の生活支援・医療支援 ～カレー屋の皮をかぶった作業療法士の実践～
話題提供:菅沼映理さん(ammikkal代表、作業療法士)



この日は菅沼さんが静岡県浜松市を拠点に実践している在留外国人の生活支援と就労支援の取り組みをご紹介します。菅沼さんが目指しているのは、「外国人がいる街の風景を当たり前にする」(=いろんな背景を持つ人を受け入れやすい風土づくり)です。最近「浜松市版多言語医療機関検索アプリ開発」を行うHELP YOU PROJECT 浜松を立ち上げました。日本で暮らす、日本語を母語としない外国人が、どのように医療機関へアクセスするのか？どんな課題があるのか？どのようなアプリを作ったのか等を各地で紹介しています。間口を広くしてご自身の専門性を惜しみなく活かす、そんな菅沼さんの熱い思いが伝わったのか、プレゼン後のディスカッションも盛り上がりました。

3月22日:日本における日系南米人の30年 ～生活相談窓口からの定点観測とこれから～
話題提供:村松紀子さん
(自治体国際化協会地域国際化推進アドバイザー、愛知県立大学外国語学部非常勤講師)



働き盛りの年齢で来日した日系南米人の多くは60歳前後となり、病气・障害・介護の課題に直面しています。独居・貧困・帰国困難など、日本人よりも抱えている問題が大きいことは容易に想像できます。村松さんは30年という長きにわたり彼らに寄り添い、ライフステージごとに表れる課題に共に取り組んできました。

海外ルーツの人びとに対して、私たちは生活習慣の違いに戸惑ったり、時には日本の生活習慣になじむよう強いることもあったかと思えます。でも、村松さんのお話をお聞きして、いま目の前にいる人がどんな理由で来日し、自国や日本でどんな生活をして今に至っているのかを、社会的背景と共に理解することの必要性を感じました。

5月24日: 能登半島地震の被災者支援 –リハビリテーションの視点で–
話題提供:大室和也さん(認定NPO法人 難民を助ける会(AAR Japan)、理学療法士)



AAR Japanは2011年の東日本大震災の被災者支援をはじめ、地震・豪雨・台風災害などの被災者の支援にあたっています。勉強会では、元日に発災した能登半島地震での支援活動をご紹介します。大室さんの専門性にも関連する「大災害におけるリハビリテーションスタッフの役割と課題」について考えました。大室さんによると、今回の能登半島地震の特徴は「非日常時の大災害」とのこと。被災者に年末年始で実家に帰省していた人もいたことや、公的機関や病院・福祉施設の多くが年末年始シフトで一時的に機能低下していたことなどが被害に影響しました。災害対応はどこでもシミュレーションされていると思いますが、年末年始など究極の非日常までも想定する必要があることを、大室さんのお話を聞いて改めて実感しました。

【今後の勉強会】

*ご確認やお申込みは、以下のウェブサイトをご覧ください。
<https://biph.jp/study-meeting/>

回	日時	テーマ	担当
91	2024年7月26日(金) 18:30-20:00	みんなで走ろう！～ユニバーサルランの取り組みを通じてインクルーシブなまちづくりを考える～(オンラインのみ)	山田規央さん (独立行政法人国立病院機構 西新潟中央病院 理学療法士)
92	2024年9月27日(金) 19:00-20:30	心で感じる多文化共生ワーク -インクルーシブ防災・減災に求められる理想と現実の乖離からマジョリティへのアプローチを考える-	磯貝明美さん (Diversity & Inclusion Nishi Tomo 代表 災害支援ナース)
93	2024年11月29日(金) 18:30-19:30	BiPH活動報告 (終了後は年次総会となります)	BiPH事務局
94	2025年1月	調整中	

参加費:BiPH会員500円/回(年会費と合わせてご請求します)
非会員1,000円/回(クレジットカード利用またはコンビニ払いの場合)、または500円/回(口座振込の場合)

勉強会は原則対面とオンライン (Zoom) のハイブリッドで開催します。ただし、開催日時、方法、会場は回によって異なります。上記は7月時点での情報ですので、お申し込みの際はBiPHのウェブサイトで最新情報をご確認ください。

【「新型コロナに対する公正な医療アクセスを全ての人に！連絡会」について】

新型コロナ感染症の話題はめっきり減りましたが、「新型コロナに対する公正な医療アクセスを全ての人に！連絡会」の活動は続いています。医薬品・医療技術への公平なアクセスは、今後も取り組み続けるべき課題です。BiPHも団体としてこの連絡会に参加しています。参加する個人・団体は現在も募集中とのことです。詳しくは以下をご覧ください。(ウェビナーの貴重な動画や資料も公開されています。)

「新型コロナに対する公正な医療アクセスを全ての人に！」連絡会

ご参加・ご協力の呼びかけ <https://ajf.gr.jp/covid-19/network-covid19/>

【編集後記】

フロントページでご紹介した「学ぶことは変わること」の中で、著者のデビッド・ワーナー氏はヘルスワーカーに対して、自分の言動が相手の自立や主体性、ひいては尊厳を傷つけていないか常に自身に問いかけるよう戒めています。その下には、医者や役人に向かって地域住民が「私たちがあなたたちを変えるんだ！」という場面も描かれています。初版の出版後40年以上たった今でも色あせない言葉の数々…。手元に置いて、折に触れて読み返したい本だと、翻訳を終えてもなお改めて感じています。

【会員募集】

当会は活動にご賛同いただける皆様からの会費で成り立っています。ぜひ会員としてご支援ください。会員の種別、払込先は以下の通りです。また、ご寄付も随時ありがたくお受けしております。詳細は事務局までお問い合わせください。

個人正会員3,000円/年、個人賛助会員3,000円/年、法人会員30,000円/年

振込先:ゆうちょ銀行 00870-9-126227 (シャ)ブリッジズインパブリックヘルス

会報「BiPHかわらばん」2024年7月号(通算13号)

発行:一般社団法人Bridges in Public Health

代表理事:樋口倫代

〒467-0027 名古屋市瑞穂区田辺通1丁目22番地2

TEL:052-846-5878 E-mail:adm.office14@biph.jp

URL:<https://biph.jp/>

FB page:<https://www.facebook.com/biph.adm/>



BiPH
Bridges in
Public Health